



総務副大臣としての国際活動について

総務副大臣 たむら のりひさ
田村 憲久



はじめに

名誉あるITUクラブにお招きいただきましてありがとうございます。

ただいま御丁寧な御紹介をいただきましたが、政治家というのは変な人種で、人に言われて初めて自分の趣味が分かる(笑)。そんな趣味があったのかなあと思っています。空手と言えば、大学のときに1年やって佐渡島に合宿に行ったときに逃げ出した覚えがありますし、柔道も国会議員になってから名誉初段をいただいたような次第で、決して趣味とまでは言えないものです。ただ、趣味を忘れるほど非常に忙しい毎日を送らせていただいています。

特に、総務省は忙しいところで、就任4か月目で既に3回ほど海外に出張してきました。どれもきついスケジュールで、ほとんど現地には滞在していません。中でも忙しかったのが香港でのITU世界テレコム(2006年12月)に出席したときで、月曜日の朝10時に成田を発って香港に向かい、世界テレコムでキーノートスピーチをして、その後もびっしり組まれたスケジュールをこなし、帰ってきたのが次の日の朝10時でした。24時間で行って帰ってきたわけです。また、本年1月7日からは、アメリカのCES(Consumer Electronics Show)に行ってきました。これも、余裕のない出張でしたが、非常に衝撃を受けました。

今日、ここにお越しいただいている皆様方は、ICTの専門家の方々ですから、CESでの驚きや感想をくどくどとお話ししても失礼な話かとは思いますが、何かのときにお役に立てただけだったと思いますし、今、政治がどんな課題を抱えているのかということも含めまして、少しばかりお話をさせていたいただきたいと思っています。

日本の顔が見えにくい

総務副大臣に就任してから最初の出張は、ITUの全権委員会(2006年11月、トルコ・アンタルヤ)でした。井上友二さんにITUの電気通信標準化局長に立候補していただきましたが、我々の力不足で79対83、わずか4票差で残念な結果となってしまいました。ここで感じたのは、日本のプレゼン

スというものが、落ちてはいないのかもしれませんが、他の国に比べて若干差がついてきているということです。日本が嫌いだという国も政治がらみの部分で若干あるかもしれませんが、話をしますとほとんどの国は日本を嫌ってはいませんし、日本に大変世話になっていると言います。ただ、最近日本よりも世話になっている国が増えてきているというのが現状です。

もしこの標準化局長選挙が最初にあったとしたら、多分井上さんは当選されていたと思いますが、残念なことにこの局長選挙が最後でした。ヨーロッパの候補者は、主要ポストを全部他国に先に取られてしまい、残るはこしかなないという状況になっていました。したがって、ヨーロッパもメンツ上、一つは役職ポストを取らなければならない、アジアはその前に中国が事務総局長ポストを確保していましたので、結果的にあおりを受けてしまったと思います。

空港から会場まで行く道でも、昔はパナソニックやソニー等、日本の家電メーカーの看板がたくさんあったなと思いながら、今はLGとか、サムスンがやたらに目につきました。日本の企業もそれぞれに頑張っていると思いますが、途上国も含めて一時よりは他の国に後れを取っている部分があるのかなという気がいたします。それもそれぞれの企業の戦略ですから、どれがいい悪いという話ではないのですが、全体として日本の顔が見えにくくなってきているという感じでした。

日本のプレゼンス向上には政治家の頑張りも必要

企業ばかりではありません。政治の責任も重い。今回もトルコのアンタルヤでの総会では4~5日滞在して井上さんの応援をしたかったのですが、国会会期中ということで2~3日で帰らざるを得ませんでした。ITUの電気通信標準化局長というのは重要なポストであり、これを日本が取るか取らないかによって、将来の国際標準化に当たって日本が主導権を発揮できるかどうかに影響してくるわけです。これを取らないとその後の国際競争力にも影響が出てくると力説したのですが、

今回の私の仕事は、日本のレセプションで井上さんを支援



することでした。レセプションではお寿司を出すことになっていて、最近、諸外国の面々もお寿司を楽しみにしていますから、そこで私がスピーチをして、副大臣主催のレセプションで大いにアピールしようということだったのです。しかし、その前日に帰国しなければならなかったのです。その場に私がいて、「ありがとう」と握手して回れば、10票までは引っ繰り返す自信はありませんが、2票ぐらいは入れてもらえたのではないかと。そう考えると本当に申し訳なかったと思っています。

香港で開催されたITUの世界テレコムでも、今回は中国が全面的にバックアップしていましたから、中国の力をというものを改めて感じました。なにしろ1000人ぐらいが一堂に会した晩さん会でしたから壮観でした。1000人で一緒に着席して食事をするというのは中国では当たり前ですが、私はたまたま香港特別行政政府の法務長官と同席しました。彼が、今度我々も国会の中に副大臣ポストを作ろうと考えている、日本では既にあるそうだが、どうかと聞かれたので、ありのままをお話ししました。

本来は、大臣は国会の委員会で忙しいので、海外へ出て行って日本の顔を売るために副大臣制度を作り、大臣が海外に行く場合には副大臣が代わりに国会答弁をするということでした。日本が海外で力を付けていくために必要なことであるということだったのですが、最近は大変も副大臣も海外へ行くと言われるようになっている。

この話を香港の法務長官にしたところ、我々はそれをするために副大臣制度を作ろうと思っているが、どういう点に気を付けたらそういうことが起こらないかと聞かれましたので、強い野党がなければ大丈夫だと答えました。香港はそれなら大丈夫だと言っていました、日本の副大臣制度も、制度創設の趣旨が十分に発揮されない状況に陥っているところがあります。

このようなことは、通信の分野だけではありません。私がアンタルヤからドイツ経由で帰ってくるときに、同じ飛行機に厚生労働副大臣の武見敬三氏が乗っていました。意気消沈しているようなのでどうしたのかと聞くと、WHOの選挙で中国に完敗したというのです。確かに日本のプレゼンスは落ちている、我々政治家がもっとも海外へ出て行って活動しなければ諸外国に負けてしまうということで意気投合し、すぐに副大臣会議を開き、官房長官等々に申し入れをいたしました。ただ、今国会では無理なようで、少し時間がかか

るようですが、政治家が動かなければ意味がないので、我々もなんとか注力していきたいと思っています。

諸外国の技術開発状況は脅威

1月7日からは、アメリカに行ってきました。シスコシステムズなどに行っているいろいろな話をしましたが、向こうでは日本のブロードバンドの普及率に非常に注目をしていました。光ファイバが普及する中、NGNという新しい通信方式、次世代ネットワークがいよいよ始まるということで、これを商機にしようという意欲を持ったアメリカの企業がいくつかありました。実験をさせてもらえるとありがたいという声もありました。日本はインフラが非常に整備されていますが、サービスやコンテンツという点から見ると、まだまだ発展の余地があるなという感じがします。

NGNのような新技術が世界に普及していくときに、日本を世界のモデル地域にしているいろいろな実験を試みた上で、自分たちが競争力をもって世界市場に参入していこうということで、日本の市場に対して大きな期待を持っているという声が聞かれました。

こういう話に刺激を受けながらCESを回っていたのですが、我々はICT国際競争力懇談会というものを大臣の下につくり、先日中間とりまとめを出しました。元々の発想として、大臣の中には携帯電話がありました。日本の携帯電話は性能的に非常に優れているのに、世界の市場ではシェアが10～15%でしかないのです。日本の携帯電話端末をもっと世界に売り込んでいくためにはどうしたらいいのか、これを懇談会で議論してもらおうという話だったのです。この携帯電話についても、アメリカは音楽(iPod)の分野から携帯電話(iPhone)の分野に入ってきてようとしています。また、サムスンもノキアも高機能化はかなりのところまで来ています。ワンセグメント、デジタルテレビを見られる携帯電話は日本だけだと思っていたら、サムスンも、使っている電波の間を使って新しい方式で携帯電話でデジタル放送が見られるものを開発して売り出そうとしています。ノキアでもデザインの優れたものを出してきていましたし、我々がびっくりするような機能も付いていて、放っておくと大変なことになるということを改めて強く感じました。



日本は付加価値の高いICT技術で競争すべき

ここからは私見ですが、ICT国際競争力懇談会の中間とりまとめの中で、携帯電話機にはローエンドとハイエンドとがあり、日本はローエンドの部分にはあまり力を入れてこなかった、今後はローエンドにも力を入れていくべきで、戦略の中に入れようというのですが、私は高機能に特化した方がいいのではないかと思います。日本が一番得意とするところは、付加価値の高いところですから、ローエンドを国が応援する必要は少ないのではないのでしょうか。企業がそれぞれもうけを目指して頑張っていたのは結構ですが、国が応援するという意味を考えれば、これからはやはり付加価値の高い分野に注力していくべきだと思います。そして、この分野は日本のICT競争力の象徴ですから、我々としては、これから全精力を注ぎ込んでICT国際競争力懇談会でまとめた内容を実行していきたいと思っています。

総合科学技術会議で話をしていたときに、最後に奥村委員のほうからATRの自動翻訳機の話が出て、実物を見せてもらいました。安倍総理が話されたことを瞬時のうちに英語、中国語に換えてしまうのを見て、自動翻訳機はここまで進んだのかと驚きました。私は英語が苦手で、プレゼンテーションをするときは1週間も悩んで、さらにイントネーションのマークの付いた原稿を作ってもらっていますが、これができたらそんな必要もなくなるわけです。

自動翻訳機のこれからの活用方法を聞いてみると、まだまだ問題点はあるということでした。方言、本人のイントネーションによって、すべてがうまく翻訳できるまでに至っていない。ただ、これからはそれを持ち歩いて自分独自の翻訳機を作っていく時代になるだろうということでした。隣の人と自動翻訳機を使いながら英語と日本語でしゃべるだけでなく、これをパソコンに入れると、パソコンを口でしゃべって動かせるようになる。車もそれを付ければ自分の声でしか動かない車になるかもしれないということで、使い道はいろいろあるというのです。これもコミュニケーションの一環であり、ICTの分野でありましょう。

こうして見てくると、日進月歩、科学の世界はいろいろ進歩をしているなど感心するわけですが、こういうハードウェアやソフトウェアが進んでいるのに比べて、コンテンツの面で、解決しなければならない問題が出てくるようになると思います。

取り留めのない話をさせていただきましたが、皆様方には我が国の情報通信分野、放送分野を巧みに先導していただいておりますので、どうかこれからもこのITUクラブを中心に、我が国のこの分野における発展にお力添えをいただきますように心からお願い申し上げまして、私の講演を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

(2007年1月30日第353回ITUクラブ例会より)



第353回ITUクラブでの講演風景